

創造における情動の役割 ——ダマシオとベルクソンの考察を通して——

川里卓 (名古屋大学)

本論文の目的は、ポルトガル出身でアメリカにおいて活躍する脳神経科学者のアントニオ・ダマシオ(1944-)と、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン(1859-1941)の情動に関する考察を通して、創造における情動の役割とは何かを示すことである。

ダマシオは彼の代表作『デカルトの誤り』(以下『誤り』)において、脳科学の観点から情動(emotion)と感情(feeling)について考察を加えている。例えば、情動についてダマシオは、「情動は、ある前提をより際立たせ、そうすることで、その前提の利益になるように結論にバイアスをかけている」(『デカルトの誤り』田中訳、15頁)と述べている。情動は私たちが選択を行う方向付けをするとダマシオは考える。一方で、感情(feeling)についてダマシオは、「感情の本質は、ある対象と結びついている捉えがたいメンタル・クオリティといったものではなく、ある特定の風景の——つまり身体の——直接的知覚である」(前掲書、24頁)と述べ、感情(feeling)が身体と密接に結びついた心理状態である点をダマシオは強調する。

ベルクソンは『道徳と宗教の二つの源泉』(以下『二源泉』)において、「創造は何よりも情動を意味する⁽¹⁾」(DS, 1013, 『道徳と宗教の二つの源泉』合田・小野訳、60頁)と述べ、創造と情動(émotion)を同じものとする。本論で詳しく論じるが、ベルクソンは情動に二つのものがあると言う。一方は「知性の下位にある(infra-intellectuelle)」ものであり、他方は「知性を超えた(supra-intellectuelle)」ものである。両者はどちらも情動的な状態という点で共通なものである。しかし、後者は「諸表象を孕んでいるが、どの表象も真に形成を遂げたものではなく、情動がその有機的な発展によって自身の実体から引き出した、あるいは引き出しうる」(DS, 1012, 邦訳 59頁)情動、すなわちそれ自身が生命の根源から出てくる情動である。創造の根底には情動が存在し、この種の情動が、人間の創造の領域を拡大してきたとベルクソンは考える。

上記の二人の見解を検討する前に、ここで同じ「感情」と訳される二つの言葉 sentiment と feeling、そして「情動」(émotion)という語について、辞書による定義を確認しておこう。「感情」(sentiment)とは、「諸表象に結びつけられた、十分に安定し持続的な、複合的情動(affectif)の状態⁽²⁾」、また、「感情」(feeling)には複数の定義が記述されているが、いくつか取り上げる

と、「心または諸感覚を通して感じられる何か」または「身体的に感じ取る能力」と定義されている⁽³⁾。後者の定義は、上記で述べたダマシオの定義に重なるものである。最後に、情動(émotion)とは「複雑な意識状態。一般に突然で、瞬間的、身体的な動揺を伴うもの⁽⁴⁾」と特徴づけられている。

上記の内容を簡単にまとめると、「感情」(sentiment)は表象と関係した心理状態であり、瞬時に消え去るものではなく、様々な状態が複合的に集まって形成されたものである。「感情」(feeling)は、ダマシオの定義に合わせて述べるなら、身体性に結びついた認識である。一方、「情動」(émotion)とは身体的なもの結びついた、これも複合的な意識状態であるが、こちらは瞬間的なもので、「感情」のように持続的なものではない。これら定義を押さえたうえで、以下ダマシオとベルクソンの考えを検討する。その中で創造における「情動」の役割が何であるか示したい。

1・脳科学的観点から見た「情動」の役割

ダマシオは『誤り』などの著作において、情動に重要な役割を置いている。例えば、「情動には直観において、つまり、直接関係するすべての論理的段階を意識することなく特定の結論に達する素早い認知的プロセスにおいて、果たす役割があるということ。それは必ずしも、中間的段階の知識が存在しないという話ではなく、単に、情動がひじょうに直接的かつ迅速に結論を下すので、多くの知識を心に思い浮かべる必要がない」(前掲書、16 頁)という見解をダマシオは提出する。すなわち、理性が論理的な筋道を立てて考察を展開するのに対して、情動はそれら論理的な推論の段階を無意識的に素早く通過し、最終的な決断の方向性を、理性が行う以前にすでに描写しているという。一般的には、情動は推論に関するものとは考えられないが、ダマシオはここで一般的な見解とは異なる観点を提出している。以下本章では『誤り』の第七章「感情と情動」および第八章「ソマティック・マーカー仮説」の議論を検証し、ダマシオの理論における「情動」の意義を検討する。

1.1・二つの情動と感情

ダマシオは「情動」(emotion)と「感情」(feeling)という言葉を区別して使用している。これら二つの言葉の間のニュアンスの違いは何か。ダマシオは次のように述べている。

なぜ私は「情動」(emotion)という言葉と「感情」(feeling)という言葉を相互に置き換えられるような形で使わないのか？一つの理由は、情動と関係する感情もあるけれども、関係しないものも多いこと。もしわれわれが油断なく気を配っていればすべての情動が感情を生むが、すべての感情が情動に由来するわけではない。情動に由来しない感情を私は「背景的感情」と呼んでおり、それについては後で触れる。(前掲書、227頁)

ダマシオによれば、情動は全て感情に関係しているが、感情の全てが情動に関係しているわけではない。言い換えれば、あらゆる情動から感情へ移行する流れは存在するが、感情から情動へ移行する方向性は、必ずしも成立するわけではない。すなわち、感情の一部は情動とは独立に存在することができ、それら情動に関係しない感情を、ダマシオは「背景的感情」と呼んでいる。本節では、まず情動とは何かを検討し、次に感情について詳しく検討してみよう。

さて、ダマシオは「情動」に一次の情動と二次の情動があると考え。一次の情動は、「環境中の特定の刺激により呼び起こされる基本的機構」(前掲書、209頁)、すなわち「特定の身体反応パターンという、生得的にセットされた柔軟性のない機構」(前掲書、209頁)である。言い換えれば、環境から一定の刺激を受けると、意識的な働きとは別に身体が自然と反応する働きをダマシオは「一次の情動」と呼ぶ。彼はこれをウィリアム・ジェームズの引用を取り上げて説明している。ダマシオが『誤り』のなかで用いている箇所を、ここでもそのまま引用するならば、ジェームズは、「人は怒りの状態を思い描くとき、胸中のうっふん、紅潮した顔、拡大した鼻腔、くいしばった歯、荒々しい行動の衝動を一切想像せず、代りに、弛緩した筋肉、穏やかな息づかい、平静な顔でいられるだろうか？」(前掲書、207頁)と述べ、心理状態を身体上に現れる特徴と結びつけて考察している。言い換えれば、情動は身体的表出と切り離して考えることができない。ダマシオが言う「一次の情動」とは、環境から受け取る刺激に対して、身体的な次元で行動が遂行されるための引き金となる情動である。

これに対して、ダマシオは「二次の情動」があると考え。ダマシオは二次の情動を次のように説明している。

非意識的レベルでは、前頭前皮質中のネットワークが、前述のイメージ処理から生じる信号に自動的、不随意的に反応している。この前頭前野の反応は、どのような状況には通常どのような情動反応が組み合わされてきたか、ということに関する知識を統合している傾性的表象から生まれる。言い換えれば、その前頭前野の反応は、〈生得的な〉傾性的表象からではなく、〈後天的な〉傾性的表象から生まれる。(中略)二次の情動に必要な前頭前野の後天

的な傾性的表象は、一次の情動に必要な生得的傾性的表象とは別のものである。(前掲書、218-219 頁)

ここでダマシオは、ある刺激に対する「生得的」な反応である一次の情動と、過去の反応パターンを踏まえ現前の状況に対する二次の情動を区別している。二次の情動とは、言い換えると、「われわれが感情を経験しはじめ、〈対象や状況の分類〉と〈一次の情動〉との体系的なつながりを形成しはじめるとき」(前掲書、214-215 頁)に生じる情動である。二次的な情動においては、一次的な情動が単に身体的なレベルを問題としていたのに対して、過去の経験に基づく「後天的な」傾性的表象が問題となる。例えば、同じ道で何度か続けてへびに遭遇したとすると、次回散歩する時には、「へびが出るかもしれない」という過去の経験と結びついた情動が生じる。これはへびを直接的に知覚して、逃げるという情動が生じる場合とは異なる情動である。すなわち、一次の情動が目前に存在する刺激に対する直接的な反応であるのに対して、二次の情動はそこに過去の経験や判断を介入させた情動である。このように、一次の情動に対する「対象や状況の分類」という特徴、一種の判断が入り込んだ情動を、ダマシオは「二次の情動」と呼んでいる。

以上、二種類の情動について検討した⁵⁾。次にダマシオの議論の枠組みにおける「感情」(feeling)について検討する。ダマシオは、すでに述べたように、身体で起こることを知覚する認識を「感情」と定義している。「間断なく更新されていくわれわれの身体の構造と状態をじかに見渡せる窓をとおしてわれわれが見るもの、それが私の考える感情の本質である」(前掲書、25 頁)。一次の情動で身体表面に現れる特徴と情動の間に関連が見られたように、「感情」は身体をモニタリングする心の働きである。私たちは単に外部世界を認識しているだけでなく、自身の身体の内的な状態、すなわち「間断なく変化する身体風景の眺望」(前掲書、228 頁)を同時に知覚している。ダマシオは言う。「連続的に変化する身体状態がポジティブで快いとき、頭は速く回転し、アイディアは豊かだが、身体状態が悪くなると、頭の回転は悪くなって反復的になる」(前掲書、25-26 頁)。身体状態は私たちの心理状態や思考状態に密接に関連し、感情を通して、私たちが生存に関わる判断を行うきっかけを与える。言い換えれば、身体の状態は、身体の状態をむしろ反映する気分や様々な心理状態として、常に私たちの意識に入り込んでいる。

さらに、ダマシオは、心理状態は身体との関連においてだけ捉えられるのではなく、その身体が位置付けられる環境の中で捉えられる必要があるという。私たちが目の前の状況に不適応な状態にある場合、状況への不適合性は感情を介して私たちの意識へ伝えられる。すなわち、

感情とは、人間の特質と環境との適合または不適合に対するセンサーである。(中略)感情も、そしてそれを生み出している情動も、けっして贅沢品ではない。それらは内なるガイドとして機能し、われわれが他者に合図を伝えるのを助け、今度はその合図がまた彼らをガイドする。感情は実体のないものでもなければ、捉えがたいものでもない。伝統的な科学的知見に反し、感情はまさに他の知覚と同じような「認知」である。(前掲書、26頁)

ダマシオは、感情が、私たちが生活する中で自身の身体を含めた環境を「認知」する役割を果たしているという。私たちが環境に上手く適応できていない場合、不愉快ないしは苦痛という感情が生じる。反対に、環境に上手く適応できていれば、感情を通してその身体の状態が私たちに示される。これは、周囲の環境との関わりにおいて生じる各々の身体状態が、心理的な状態にも影響を与えることを意味している。言い換えれば、感情を通して、身体は私たちに状況への適応/不適合という合図を送っている。この意味で、ダマシオは感情を「認知」であると考え。また、これは彼が「ソマティック・マーカー」と呼ぶ理論の中でより精緻に検討されている。次にその点を検討してみよう。

1.2・ソマティック・マーカー仮説

ダマシオは情動に関する議論の中で、「ソマティック・マーカー」という概念を提出している。本節では、二次の情動から生じた一種の特殊な感情である「ソマティック・マーカー」が、意識的な過程以前ですでに推論の方向性を決定し、推論の素描を描いていることを明らかにする。まず、ダマシオが「ソマティック・マーカー」を定義した箇所を引用してみよう。

ソマティック・マーカーはわれわれのために何かを熟考するのではない。それは、いくつかのオプション(危険なもの、または好ましいもの)を際立たせ、その後の考察からそれらをすばやく除去または選択することで熟考の手助けをしている。それは予測の自動システムと考えてもよく、(中略)予測される将来の多様なシナリオを評価するために作用する。(前掲書、272-273頁)

私たちが何かを決断する際、様々な選択肢からその状況に適した選択をする必要がある。ダマシオは、この選択を行う際の最初の方向づけを「ソマティック・マーカー」という概念を用

いて説明する。この概念は私たちの思考の方向性と推論を導く動力のような役割を果たす。「ソマティック・マーカー」は二次の情動から生じる一種の感情であるが、ここで言われる感情は、「あの人は感情的な人だ」という否定的な意味で用いられるものではなく、むしろ適切に現前の状況に適応するという、積極的な意味を持つ感情である。言い換えると、過去の経験を生かしながら現在の行動に役立つ情報を際立たせ、意識的な推論を手助けする感情である。ダマシオは次のように述べている。

〈ソマティック・マーカーは二次の情動から生み出された特殊な感情の例〉である。それらの情動と感情は〈学習により、いくつかのシナリオの予測される将来結果と結びついてきたもの〉だ。ネガティブなソマティック・マーカーが特定の予測結果と並置されると、その組み合わせが警報として機能する。反対にポジティブなソマティック・マーカーが並置されると、それは誘因の合図となる。(前掲書、272頁)

一次の情動を経験し、それに体系的な評価を加えるところから生じる二次の情動には、過去の経験を現在の判断へと結びつける特徴がある。ソマティック・マーカーはこの「二次の情動から生み出された特殊な感情」である。「ソマティック・マーカー」は「学習」を含む感情の働きであるとダマシオは言う。二次の情動では、現在の状況における過去の経験や判断が問題となるのに対し、「ソマティック・マーカー」では、学習によって将来生じる結果を予測するという特徴がこれに加わる。一例をあげてみよう。過去に山に行って恐ろしい思いをしたことがある人には、次回登山に行く場合、恐怖という感情が伴う。これは彼が鈴を持っていくという行動を促す。この場合、過去の経験を含む情動が、新たな登山における彼の行動の方向性を決定している。すなわち、情動のレベルにおいて、彼の行動の方向性はおおかた決定されている。つまり、将来生じる状況に対して持つ「特殊な感情」をダマシオは「ソマティック・マーカー」と名付けている。

このような情動的な判断が存在する理由は、選択のあらゆる可能性を推論する手間を省き、決断の方向性をあらかじめ決定することにある。意識的過程以前の推論が存在しないとしたら、全ての状況を考慮し判断する必要があり、それだけで情報処理に時間がかかり、目の前の状況に対する適切な反応を妨げる。それゆえ、「ソマティック・マーカーはたぶん決断の正確さと効率を増している」(前掲書、272頁)。ソマティック・マーカーは、将来生じる出来事に対する決断の方向性を、過去の「学習」を瞬時に参照し描写する。

ソマティック・マーカーは芸術ないしは科学における直観においても働いているとダマシ

オは考える。彼は数学者のアンリ・ポアンカレの文章を取り上げて、自身の説との類似性を強調している。ダマシオが引用しているポアンカレの文章を引用してみよう。

数学的創造とは何か。それは既知の数学的実在を使って新しい組み合わせをつくることではない。(中略)そういう組み合わせは無数にあるだろう(中略)創造するということは無用な組み合わせをすることではなく、有用でごく少数のものをつくることにある。創造は洞察であり、選択である。(中略)不毛な組み合わせはもともと創造者の心に浮かばないのである。あまり有用でない組み合わせはだいたい意識のフィールドにあらわれてこない。(前掲書、293頁)

ダマシオは推論以前に情報の選択を行い、問題を解決する心の働きに「直観の源泉」があると述べている(前掲書、292頁)。感情は、過去に学習し無意識に貯蔵されている情報(ワーキングメモリ)をもとに、展開可能な様々な可能性のなかから「順位」を創出し、無意識のレベルで情報の選択を行う。直観的に捉えられる情動が、私たちの行動を示し、過去の経験を有用に用いながら、精神の次元を新たな段階へ切り開く。創造の場面において情動は、結果として結実する作品の下図ないしは素描を芸術家や科学者に示す働きをする。それは単なる過去の経験の反復ではない。ポアンカレの引用を行いながら、ダマシオは創造の源泉に情動が存在すると考え、情動に学問的・芸術的な創造の働きを読み取っている。この見解は、ベルクソンが情動の役割として提出する特徴と類似した特徴を持っている。次にベルクソンの理論を検討し、創造における情動の役割について考察を深めていこう。

2・創造と情動

本章では、『道徳と宗教の二つの源泉』の第一章で論じられる「情動」の役割について検討し、そこから創造における「情動」の役割とは何かを示す。本章では、まず情動が偉大な創造の根底に存在し、精神を新たな次元へ開示することを明らかにする。次に『二源泉』の第一章における二つの情動の様態について考察し、ベルクソンの議論における「情動」の役割を示す。

本章の考察を始めるにあたって、まずベルクソンが情動(*émotion*)と感情(*sentiment*)の区別を、『二源泉』の草稿で行っている箇所を取り上げてみよう⁶⁾。ベルクソンは『二源泉』の第一章「情動と創造」の最後の段落で、情動が表象に先立つものであり、偉大な作品の根底に芸術家の情動が存在すると述べている(DS, 1014, 邦訳 62-63頁)。この段落に関して、ベルクソン

の『二源泉』の草稿には、ベルクソンが本文から消去した部分であるが、段落の最後に次の文章が加えられている。「それはつまり、道徳の最も高い部分のうちに、情動の開花を見ながら、私たちは感情に呼びかけているのでは全くない⁽⁷⁾」(NFR 14377)。「情動と創造」の次に議論される「情動と表象」においては、最初の段落の文章が上記の引用と類似した構文から始まり、その後道徳と情動の関係が論じられる。上記のベルクソンが本文から削除した部分においては、道徳に関してではあるが、ベルクソンは情動と感情を別の概念として扱っている。では、情動は感情とどのように異なるのか。その点を、以下ベルクソンの議論を追いながら検討してみよう。

ベルクソンは「一つの新たな情動が、芸術、科学、文明一般の偉大な創造物の起源にあるということ、それは疑いなくにわれわれには見える」(DS, 1011, 邦訳 58 頁)と述べ、情動(émotion)が偉大な創造において私たちの精神を前へ推進する働きがあると考ええる。ベルクソンはこれをジャン・ジャック・ルソーが山岳を眺めた時の例を用いて説明している。ベルクソンは次のように述べている。

ルソーは山について、新しく独自の一つの情動を創造した。ルソーがそれを流通させたので、この情動はありふれたものとなった。(中略) 山によって引き起こされた基礎的諸感情は感覚に隣り合うもので、新しい情動と一致していたはずである。ところが、ルソーはこれら基礎的感情を寄せ集めた。ルソーは、それ以来単なる倍音になってしまうこれらの感情を一つの音色のなかに入らせ、真の創造によって、彼はその音色の根本的な調子を与えたのだ。(DS, 1009-1010, 邦訳 55-56 頁)

ルソーは山岳に関する新たな情動を創り出したとベルクソンは考える。ルソーにおいて現れたこの新たな情動は、私たちが山を眺めて知覚する形や色彩など感覚の総体ではない。これら諸感覚に隣り合う感情、つまり各々の表象に結びついた感情は、ルソーの情動の中でそれぞれが独自の質感を持つようになる。すなわち、感情が一つの表象に結びついた心理状態であるのに対して、情動は創造の根底に存在し、精神の新たな次元を開示する。この創造的情動の中で「基礎的諸感情」は各々のニュアンスを持つ。新たな創造の根底には、新たな情動が存在している。そこで創造された情動は、人間が経験する新たな情動であり、生活への必要に向かう関心に還元されないとベルクソンは言う。すなわち、「自然そのものによって欲せられた魂の状態の数は決定されており、制限されている。欲求に応える行動へと駆り立てるものだという点で、われわれはそれらの状態を見分ける。逆に、これとは異なる魂の状態は、音楽家の創作

にも比される真の創作であって、その起源には人間がいる」(DS, 1009, 邦訳 55 頁)。生活する必要に規定された心理状態が存在する一方で、新たな世界を開く情動がある。

ベルクソンは情動には「知性の下位にある(infra-intellectuelle)」情動と、「知性を超えた(supra-intellectuelle)」情動の二つの種類があるという。

一方では、情動は一つの観念もしくは表象された一つのイメージに続いて生起する。つまり、感性的状態はまさに知性的状態に由来するのであって、知性的状態は感性的状態に何も負うことなく自己充足しており、たとえそれが感性的状態から反動的効果を受け取るとしても、それで得るものよりも失うものの方が多い。(中略)もう一方の情動は、表象の後に続くが表象とは区別されたままで、表象によって規定されることがない。(中略)この種の情動は、不意に到来する知性的諸状態との関連で言うと、むしろ原因であって結果ではない。(DS, 1011, 邦訳 59 頁)

第一の情動は知的状態を原因として生じる情動である。ベルクソンの議論の枠組みにおいての知性とは、物質などの固定したものを扱うときにその効力を発揮するが、生命などの流動的で変化するものを捉えることができない。言い換えると、知性的な状態とは、対象を操作する観点から眺めたものである。このような知性的状態からも情動は生まれるとベルクソンは述べているが、それはあくまで付随的な情動であり、それはルソーの情動の様に精神そのものを別の次元へ移す情動とは異なる。しかし、第二の情動は様々な表象に先立つ情動であり、諸表象をその中に含む情動である。諸表象はこの根底にある情動から派生したものであり、対象を分析し分解する「知性的諸状態」は、すでにこの情動のうちに存在する。この第二の情動について、美学者の谷川握は次のように述べている。

本来的に直観と関係するのは言うまでもなく後者[第二の情動]であるが、しかし直観が観念への飛躍であり、情動が観念を産出するものであるとすれば、情動は直観よりも深いと言わなければならない。そしてそれは存在論的に深いのである。情動とは、それがいかなるものであるにせよ何らかの創造行為を可能にする存在論的価値であると言えよう。(『美学の逆説』156 頁)。

ここで谷川は、「情動」と「直観」および「観念」の関係について議論している。谷川によれば、直観は観念へと私たちを飛躍させるという。そしてその観念は情動から派生的に生じた

ものである。ところで、ベルクソンにおける「直観」とは、対象を内的な視点から把握することを意味する。例えば、私たちは芸術作品の根底にある芸術家が表現しようと意図するものを直観的に、内的に理解する以外に方法がない。この場合、直観は芸術家が作品を通して表現する内容へと私たちを導いている。言い換えれば、直観は情動から派生する観念へと私たちを連れ戻すと谷川は考える。

これら様々な観念は最初に捉えられた情動のうちに混然一体と存在している。情動は無数の観念が派生的に生起する源泉であり、この意味で情動は直観より「存在論的に深い」と谷川は考える。ベルクソン自身は次のように述べている。「表象の帰結として表象に付加される情動とは別に、表象に先立ち、表象を潜在的に含み、ある程度まで表象の原因であるような情動が存在するのだ」(DS, 1014, 邦訳 62 頁)。第一の情動が表象から付随的に生じる派生的な情動であるのに対して、第二の情動は諸表象を既にその内部に含み、諸表象が生じる原因となる情動である⁸⁾。新たな情動が開示される根底には、この第二の情動が存在する。

さらに、ダマシオの見解と同様、この第二の情動には、諸問題を解決するための端緒が既に描かれているとベルクソンは言う。

情動こそ、数々の障害にもかかわらず知性を前進させるのだ。何よりも情動こそ、それが一体化することになる知性的要素を活気づける、というよりもむしろ、それらに生命を与え、あらゆる瞬間に、それと共に有機的に組織されうるであろうものを寄せ集め、最終的には、問題の言明を解として開花させるのだ。(DS, 1013, 邦訳 61 頁)

ここでベルクソンは、情動が既に、問題を解決するために必要な要素を収集する働きをするとして述べている。情動は、私たちが問題の前で立ち止まっていた状態を切り開き、情動自身の内部に含まれる知性的/分析的な解決方法を、思考以前の状態で直観的に働かせている。情動には問題を「先取り」して解決する能力、すなわち推論や思考が入り込む以前に、問題に対する解決の方向性を描く能力が備わっている。また、関心が向けられるためには、まず情動が存在する必要がある。すなわち、「関心を吹き込んだ問題とは情動に裏打ちされた表象であって、情動は好奇心、欲望、一定の問題が解けたことを先取りした喜びである」(DS, 1013, 邦訳 61 頁)。私たちの関心が向かう背後には情動が存在し行動の動機を与える。このように、ダマシオと同様、ベルクソンは情動を問題解決のための一種の認知であると考えている。

上記の議論をまとめよう。ベルクソンにおける情動の特徴には、(1)それまで存在していなく全く新たな世界を開示すること、(2)直観的に問題解決の道筋を立てていること、という二

点が挙げられる。ダマシオと同様、ベルクソンは情動が私たちの精神において果たす役割の大きさを強調しているのである。

おわりに

創造の根底には「情動」が存在し、それが新たな一つの世界を私たちに開示する。一般的に推論以下の働きであると考えられるが、上記の章で検討したダマシオとベルクソンは、情動に積極的に肯定的な特徴を読み取っている。すなわち、情動とは意識的な推論以前に、情報の選択などを通して私たちの思考の方向性を決定していると彼らは考える。また、情動が創造の源泉に存在するとして、彼らは芸術的思考プロセスにおける情動の役割に注目している。すなわち、創造の場面において、情動は意識の次元を新たなレベルへ導く働きをするのである。本論文では、情動の役割について検討し、創造における情動の役割を示した。

註

- (1) 邦訳、アンリ・ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人・小野浩太郎訳では、*émotion* を「感動」と訳し *sentiment* と区別していない場合があるが、本論文では *émotion* を「情動」、*sentiment* を「感情」と統一的に区別して翻訳する。また、本稿での翻訳は、すべて既存のものを用いる。
- (2) *Le Petit Robert*, p.2352.
- (3) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, p.564.
- (4) *Le Petit Robert*, p.851.
- (5) 上記の二つの情動の特徴をまとめて、ダマシオは情動を次のように定義している。「要するに情動は、単純なものであれ複雑なものであれ〈心の評価的なプロセス〉と〈そのプロセスに対する傾性的表象の反応〉との組み合わせだ」(前掲書、221頁)。「心の評価的なプロセス」とは、ある刺激に対する生得的な心の反応のことをいい、言い換えれば「一次の情動」である。これに対して、「そのプロセスに対する傾性的表象の反応」とは、「二次の情動」に対応する言葉であり、パプロフの実験に見られる情動に近いものである。
- (6) 本段落の内容は、2018年度名古屋大学フィールドワーク調査プロジェクトにおいて、2018年9月にパリ国立図書館で調査を行った成果の一部である。以下引用する箇所は、整理番号 NFR 14377, *Les deux sources de la morale et de la religion* の草稿 59 頁に記載されていた

ものである。

- (7) 以下参考までにベルクソンの草稿の原文を引用しておこう。「C'est dire qu'en voyant dans la partie la plus élevée de la morale l'épanouissement d'une émotion, nous ne faisons aucunement appel au sentiment.» (NFR 14377)
- (8) 第一の情動は、一つの表象から「帰結」する情動であり、ある表象に結びついた心理状態である「感情」とは別の意味である。

参考文献

[DS] = Bergson, H. *Les deux sources de la morale et de la religion*, in *Œuvres*, Paris, Presses Universitaires de France, 1959, pp.979-1247. (『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人・小野浩太郎訳、筑摩書房、2015年。)

Le Petit Robert, Dictionnaires Le Robert, 2017.

Oxford Advanced Learner's Dictionary, 8th Edition, Oxford, Oxford University Press, 2010.

アントニオ・ダマシオ『デカルトの誤り』田中三彦訳、筑摩書房、2010年。

谷川握『美学の逆説』勁草書房、1993年。